

愛媛大学における初年次教育用教材の改訂

—— 探究を志向するスタディ・スキルの育成を目指して ——

清水 栄子, 小林 忠資

愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室

Reflections on Revising Process of Teaching Materials for Developing Students' Study Skills

Eiko SHIMIZU, Tadashi KOBAYASHI

Office for Educational Planning and Research, Institute for Education and Student Support, Ehime University

1 はじめに

大学進学率が50%を超え、様々な学生を迎え入れる日本の大学において初年次教育の重要性が認識されている。全国の国公私立大学771校うち、690校(94%)の大学で初年次教育が行われている(文部科学省, 2015年)。実施されている初年次教育の内容としては、「レポート・論文の書き方等の文章作法(84%)」、「プレゼンテーション等の口頭発表の技法(76%)」、「学問や大学教育全般に対する動機付け(72%)」、「論理的思考や問題発見・解決能力向上(58%)」が挙げられる。

愛媛大学においても、初年次教育として新入生セミナーA、新入生セミナーB、こころと健康、スポーツの4つの初年次科目を開講している。新入生セミナーAは、「大学において自主的・能動的な学修を行う際に必要となる技能の修得や、専門分野の全体像を早い段階で広く理解することを目指す科目」であり、スタディ・スキルの育成が目的の一つである。教育企画室は、新入生セミナーAのスタディ・スキルの育成に関わる授業や教材の作成に関っている。

現在、教育企画室では、新入生セミナーAで使用する教材の改訂を段階的に行っている。具体的には、教科書で取り上げる授業内容項目の見直しと検討である。それに伴い、投影用教材の改訂も行い、2016年度前期に筆者らが担当する授業で試行的に活用した。今後も投影用教材の改訂を行うとともに、教科書の改訂にも着手する予定である。

本報告の目的は、スタディ・スキルの育成に関わる初年次用教材の改訂プロセスの整理を通して、これから教材改訂をさらに進めていく上での課題を明らかにすることである。まず、愛媛大学の初年次教育における新入生セミナー

Aの位置づけと新入生セミナーAにおける教育企画室の役割を説明する。次に、新入生セミナーAのスタディ・スキルに関わる授業で活用してきた教科書と投影用教材の特徴を整理する。そして、教育企画室のメンバーで進めている教材改訂のプロセス、改訂中の教材の特徴をまとめる。最後に、教材改訂の現在の到達点と教材改訂をさらに進めていく上でのこれからの課題を提示する。

2 新入生セミナーAにおける教育企画室の役割

2.1 初年次科目における新入生セミナーAの位置づけ

初年次教育の充実、大学教育の重要な課題の一つである。「学士課程教育の構築に向けて(答申)」では、高校から大学へという新たな学校段階への移行を支援するために、学習の動機づけや習慣形成に向けた初年次教育の充実を図ることの重要性が指摘されている(中央教育審議会, 2008)。また、「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について(答申)」においても、大学における本格的な学習への導入、より能動的な学習に必要な方法の習得などを目的とした初年次教育の重要性が挙げられている(中央教育審議会, 2014)。高校までに習得しておくべき基礎学力の補習(リメディアル教育)のためではなく、大学での学習への移行を促すための初年次教育を充実させることが、大学教育の重要な課題となっている。

大学での学習への移行を促すうえで、初年次教育はさまざまな役割をもつ。吉岡(2013)は、以下の6つの目的を挙げている。

(1) スタディ・スキルの育成

- レポートの書き方, 図書館の利用法, プレゼンテーション等を学ぶ
- (2) スチューデント・スキルの育成
学生生活における時間管理や学習習慣, 健康, 社会生活等を学ぶ
- (3) オリエンテーションやガイダンス
履修方法等大学で学ぶ上で必要な情報を提供する
- (4) 専門教育への導入
専門教育の基礎的な事項を学ぶ
- (5) 自校教育
自大学の歴史や沿革や社会的役割, 卒業生等の実績を知る
- (6) キャリア・デザイン
将来の職業生活や進路選択への動機づけや自己分析等を行う

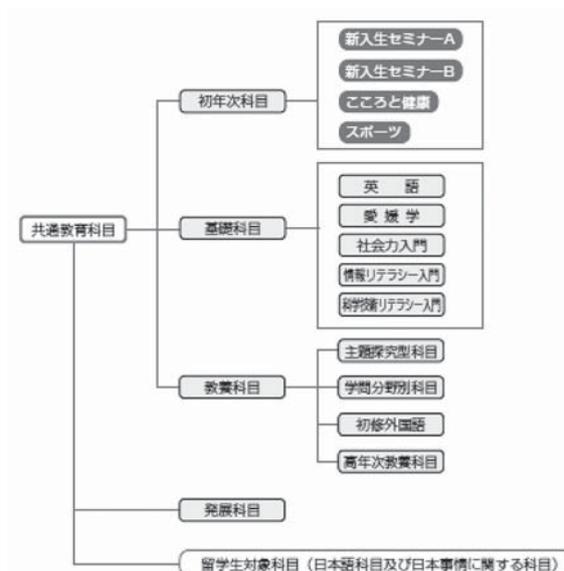


図1 共通教育カリキュラム

大学によって、これらの初年次教育の6つの役割のなかでどこに重点を置くかは異なっている。また、一般的に、初年次教育向けに複数の科目を設置することでこれらの役割を網羅しようとしている。

愛媛大学においても、多様な役割をもつ初年次教育を提供するために、新入生セミナー A, 新入生セミナー B, こころと健康, スポーツの4科目が初年次科目として配置されている。これらの初年次科目は、自立した個人として生涯学び続けるスキルの育成, 学習活動や社会生活に必要な知の運用能力の育成, 円滑な大学教育への導入を目的としている(愛媛大学教育・学生支援機構, 2012)。図1は、共通教育カリキュラムのなかでの、初年次科目の位置づけを示したものである。

初年次科目として分類されている4科目のそれぞれの目的は異なっている。新入生セミナー Aと新入生セミナー Bは、大学で主体的かつ能動的に学ぶために必要な技能を身につけるための科目である。学部・学科により多少の違いはあるが、新入生セミナー Aはスタディ・スキルの育成に重点を置いている一方、新入生セミナー Bはスタディ・スキルだけではなく学部・学科のコース・専修が持つ様々なニーズに合わせた専門教育への導入に重点が置かれている。こころと健康, スポーツは、健康的な学生生活を座学と実技の面から支援する科目である(庭崎ほか, 2012)。

新入生セミナー Aの主な目的はスタディ・スキルの育成であるが、それ以外にもさまざまな目的を持っている。具体的な例をもとに、新入生セミナー Aの位置づけを確認する。表1と表2は、理学部の2016年度新入生セミナー Aの到達目標と授業内容それぞれを示したものである。到達目標と授業計画から、スタディ・スキルの育成, スチューデント・スキルの育成, キャリア・デザインの3つの役割に関係していることが分かる。

2.2 教育企画室の役割

新入生セミナー Aにおける教育企画室の役割は2つある。1つは、スタディ・スキルに関する授業の実施者としての役割である。新入生セミナー Aは、各学部・学科単位で開講されており、授業計画や運営および評価は各学部・学科が行っている。新入生セミナー Aのうち、主に「ノートを取り方」「文献の読み方」「レポートの書き方」「プレゼンテーションの方法」などのスタディ・スキルに関連する授業を、各学部・学科からの依頼をもとに実施している。

各学部・学科からの依頼により新入生セミナー Aの授業を担当するため、学部・学科により教育企画室が担当する授業の内容や回数は異なっている。表2に示した理学部の2016年度新入生セミナー Aの授業計画のうち、教育企画室の担当した授業に下線を引いている。

表1 理学部2016年度新入生セミナー Aの到達目標

<ul style="list-style-type: none"> ・問いを立てることができる ・図書館で必要な情報を収集することができる ・話し言葉を的確にノートにとることができる ・論理的なポスターを書くことができる ・ルールに従ってレポートを書くことができる ・フレッシュマン・ポスターセッションにて、適切なプレゼンテーションができる ・グループ内で責任を持って役割を果たすことができる ・自己理解を高校時代よりも深める ・大学生活に関する危機管理ができる

表2 理学部2016年度新入生セミナー Aの授業計画

回	授業内容
1	Social Skill 1・Study Skill 1 (アイスブレイク・課題付与)
2	Social Skill 2・Study Skill 2 (危機管理・図書館利用法)
3	Social Skill 3 (金融トラブル)
4	Study Skill 3 (研究テーマ設定)
5	Social Skill 4・Career Vision 1 (国際交流・男女共同参画)
6	Study Skill 4 (レポート・ポスターの書き方Ⅰ)
7	Study Skill 5 (レポート・ポスターの書き方Ⅱ)
8	Study Skill 6 (アカデミック・ノートテイキング)
9	Study Skill 7 (ポスター発表の準備)
10	Study Skill 8・Career Vision 2 (中間報告・先輩と話そう)
11	Study Skill 9 (プレゼン・質問のコツ)
12	Study Skill 10 (予行演習)
13	Study Skill 11 (ポスターセッションⅠ)
14	Study Skill 12 (ポスターセッションⅡ)
15	Social Skill 5・Study Skill 13 (振り返り)

下線は教育企画室担当回

表2から分かるように、15回の授業回のうち、教育企画室が担当したのはスタディ・スキルの基礎に関係する4回の授業である。具体的には、「第6回レポート・ポスターの書き方(1)」「第7回レポート・ポスターの書き方(2)」「第8回アカデミック・ノートテイキング」「第11回プレゼン・質問のコツ」の4回である。

新入生セミナーAにおける教育企画室のもう一つの役割は、教材開発者としての役割である。教育企画室は、2007年に新入生セミナー向けの全学共通のテキスト『大学での学び入門』を作成した。『大学での学び入門』は、新入生セミナーAの初回の授業で学生に無料で配付している。2007年に『大学での学び入門』を作成して以降、愛大学生コンピテンシーの追加やブックガイドの修正など毎年部分的に改訂を行ってきたが、内容に関しては大幅な改訂を行ってこなかった。

教科書の作成以外に、担当する授業の投影用教材も準備・作成している。具体的には、スクリーンに投影するスライドの作成や視聴覚教材の準備である。これらの投影用教材は、教育企画室のメンバーで共有している。

3 既存教材の構成と特徴

新入生セミナーAでの学生のスタディ・スキルの育成に向けて教育企画室では、全学共通テキストの『大学での学び入門』、投影用スライドと視聴覚教材からなる投影用教材を準備・作成している。

3.1 『大学での学び入門』の構成

教科書の構成は、利用方法、用語説明、愛大学生コンピテンシーの説明、授業内容、巻末資料である。具体的には、教科書の利用方法として、新入生セミナーの授業、授業以外の科目、自学用での使い方や授業内で扱うことが想定される用語についての説明がある。次に、「愛大学生コンピテンシー」の説明とコンピテンシーを身につける方法を具体的に考え、記入するスペースも設けている。その後、以下の授業内容へと進むこととなる。

- 第1章 大学での学び入門
- 第2章 アカデミック・ノートテイキング
- 第3章 図書館での情報収集法
- 第4章 情報整理法
- 第5章 文章の読み方(1)
- 第6章 文章の読み方(2)
- 第7章 ロジカル・シンキング
- 第8章 クリティカル・シンキング
- 第9章 レポートの書き方(1)
- 第10章 レポートの書き方(2)
- 第11章 プレゼンテーション
- 第12章 コミュニケーションスキル

章ごとに必要に応じて、資料が掲載されている。「第1章大学での学び入門」を例に挙げれば、教職員への電話のかけ方や教員研究室でのマナー、教職員向けのメールの書き方がある。練習問題も用意している。例えば、「第5章文章の読み方」の後には、飛ばし読みや分析読みをするための1200字程度の文章を掲載している。

巻末には、『大学での学び入門』ブックガイドとして、教科書内で取りあげている参考文献一覧を章ごとに掲載している。そのほかに、「愛媛大学の学習支援」と題して、愛媛大学内の学習支援に関する情報も組み込んでいる。一例を挙げると、オフィスアワーやスタディ・ヘルプ・デスクなどの「学習相談」、スタディ・スキル講座やEnglish Hourなどの「課外講座」、図書館やラウンジなどの「自主学習用スペース」、パソコン演習室などの「機器・資料」である。

形状に関しては、説明が文章で示されるものではなく、章ごとに最低限の内容を箇条書きで表している。また、罫線の入ったページが各章に少なくとも1ページは準備され、ノートとして活用できるように工夫している。A4版の60数頁の形態であり、学生が授業中にノートとしても使えるように想定されている。

3.2 投影用教材の構成

投影用スライド教材は、授業で取りあげる内容の必要性、授業回の内容、ワーク、まとめて構成されている。

最初に「なぜこの授業が必要なのか」という質問を用意している。その回答として、大学在学中、就職活動時、社会に出た後での様々な場面を想定した理由を示す。各授業回とも、その日に取り扱う授業内容が、大学生活および就職後にどのように必要とされるかを説明した後に、授業内容に入っていく構成を取っている。「レポートの書き方」を例に取り上げてみると、図2のパワーポイント資料を提示し、この授業が必要とされる理由を説明した後、授業内容の説明に移っていく。説明は教科書に掲載されている内容とその補足説明資料を準備し解説していく。

ほとんどの回で授業内容の説明後に、学生の理解を深めるためのワークを準備している。「アカデミック・ノートテイキング」では、ノートの取り方、方法やコツについて説明をした後、実際に音声聞きながらノートを取るワークを行う。ワーク後、実際にそれぞれがどのようにノートを取ることができたのかを全体で確認し、準備したスライドで授業全体のまとめを行う。

授業で説明する内容について学生の理解を容易にするために、視聴覚教材を活用する場合もある。たとえば、プレゼンテーションの授業では、実際にプレゼンテーションを競っているテレビ番組やテレビショッピングの映像を視聴させる。実際の映像を視聴することで、授業の説明に対する理解を助けることができている。

3.3 既存教材の3つの特徴

既存教材の特徴として、以下の3つが挙げられる。

(1) キャリアを視野に入れたスキルの育成

第一は、キャリアを視野に入れたスキルの育成である。ノートを取る、レポートを書く、プレゼンテーションをするなどのスキルは、大学だけで活用するものではなく、卒業後の社会人としてのキャリアを歩んでいくうえでも必要とされるものである。大学だけでなく将来の職場でのスキルの活用も視野に入れた教材となっている。

スキルの必要性を示す際には、そのスキルが職場でも必要とされる具体的な場面と関連づけて説明している。図2は、文章作成能力の必要性を説明する際に提示しているスライドである。文章作成能力が、大学でのレポートやレジユメの作成、論文執筆に必要とされるだけでなく、就職活動でのエントリーシートの作成や就職後の職場での報告書作成、企画書の作成においても求められることを伝えている。

教材に組み込んでいる事例やワークにおいても卒業後のキャリアを意識したものを活用している。例えば、要約することが求められる場面の例として、職場でのプレゼンテーションや報告書の内容を上司に伝える場面が挙げられている。また、ノートの取り方に関する授業のワークでは、著名人のインタビューを聞いて上司に対してその取材ノートを送るというものを行っている。さらに、プレゼンテ

ーションの授業では、ビジネス場面でよく用いられる商品や企画の紹介のためのプレゼンテーションをもとに、優れたプレゼンテーションについてワークを行っている。

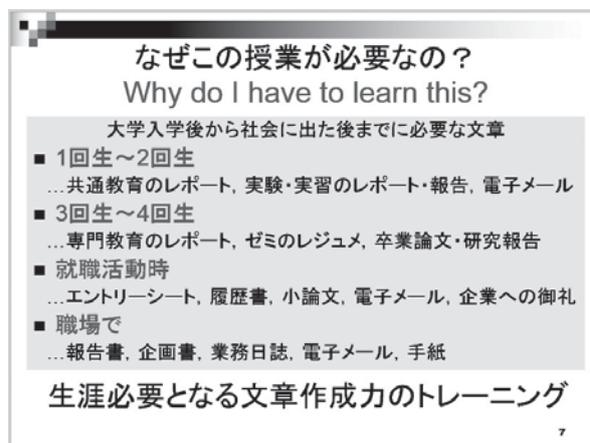


図2 文章作成能力の必要性

(2) テクニックを重視したスタディ・スキルの育成

第二は、テクニックの重視である。学生が授業ですぐに活用できるようにという意図から、どのような行動をとればよいのかというテクニックやコツに関する情報を多く盛り込んでいる。

例えば、プレゼンテーションの授業では、プレゼンの8つの鉄則として、サンドイッチ構成、ナンバリング、情報の厳選、2×2、間、アイコンタクト、シンプル姿勢、ビジュアルハンドを挙げている。このうち、2×2の法則（重要な部分は2倍大きく2倍長く強調して話す）、間（重要なポイントでは沈黙の時間をとる）、アイコンタクト（相手の目を見る）、シンプル姿勢（無駄な情報を与えない）、ビジュアルハンド（話している内容と手の動きを一致させて強調する）は、話すテクニックに関係するものである。また、文章の読み方の授業では、「マーキングのコツ」「切り(Cut)のコツ」「貼り(Paste)と修正(Brush up)のコツ」を紹介している(愛媛大学 教育・学生支援機構, 2016)。

(3) ワークにもとづくスタディ・スキルの育成

第三は、ワークを重視したスタディ・スキルの育成である。すべての授業で、個人ワークとグループワークを必ず組み込んでいる。学生のスタディ・スキルを育成するためには、教員の一方的な説明による講義形式の授業のみでは難しい。ワークをとおして学生がスキルを活用することで、スキルを習得することが期待できる。

また、スキルを活用した後は、グループで相互にフィードバックする機会を設けている。即時フィードバックは、スキルの習得を促すことができる。ワークの後には、グループでの相互にコメントするようにしている。

例えば、「プレゼンテーション」の授業回では、プレゼンの8つの鉄則を説明した後に、他己紹介を行っている。

まず、学生が2人1組となり、相手のことについて相互インタビューをする。その後、4人グループとなり、グループ内でインタビューした相手のことを他のグループのメンバーに紹介する。最後に、それぞれの紹介の仕方について、メンバー内で相互にコメントしている。

4 教材の改訂

4.1 教材改訂の理由

2007年に初版の『大学での学び入門』を作成して以降、内容に関しては大幅な改訂を行ってこなかったが、約10年が経過し見直しの時期だと考えた。見直しを考えた具体的な理由として、以下の4つがある。

1つは社会的なニーズである。現代社会において、大学には生涯学び続け、どんな環境においても「答えのない問題」に最善解を導くことができる能力の育成が求められている（中央教育審議会，2012）。このような能力の基盤となるのは、自分で「問い」を設定し、それに対して探究する力である。単なるスキルとしてではなく、探究を視野に入れたスタディ・スキルの育成を目指す初年次教育が必要ではないかと考えた。

2つ目の理由として、愛大学生コンピテンシーの導入がある。2012年に、正課教育・準正課教育・正課外活動を含めた大学全体の活動を通して「学生が卒業時に身に付けていることが期待される能力」として、愛大学生コンピテンシーが策定された。『大学での学び入門』にも、愛大学生コンピテンシーが示されているが、内容や投影教材には愛大学生コンピテンシーとの関連性をもたせることはできていない。愛大学生コンピテンシーと教材の内容を関連づける必要があると認識した。

3つ目の理由として、本学の共通教育科目のカリキュラムの変化がある。キャリアプランを考える「社会力入門」が初年次学生を対象とする基礎科目として導入された。既存の教材ではキャリアも視野にいれていたが、キャリアへの導入・関心については、「社会力入門」と共通する部分もあると考えられる。他の共通教育科目との重複を避けるために、キャリアに重点を置くのではなく、知を探究するアカデミックに重点を置く必要があると考えた。

4つ目の理由は、学生の高校での既修状況がある。高校での学習内容は10年前とは異なっている。プレゼンテーションやレポートの書き方などのテクニックに関しては、高校の総合的な学習の時間などで、既に学習している学生もいる。そのため、テクニックの紹介に多くの時間を割く必要はないのではないかと考えた。

4.2 教材改訂の検討プロセスと試行

教材改訂にあたっては、(1) 既存教材に対する意見の集約、(2) 教科書の収集と分析、(3) コンセプトの検討

と見直し、(4) 教科書の章立て案の作成、(5) 投影用教材の作成と試行、(6) 章立ての再構成を行った。以下、各ステップで行った具体的な内容を説明する。

(1) 既存教材に対する意見の集約

既存教材を実際に授業で使用している教育企画室のメンバーを中心に、既存教材に対する意見を集めた。ワークにもとづく教材の構成については、学生の意欲の向上や理解を深めるという観点から概ね好評であった。一方、既存教材の改善点として、「ワークの視聴覚教材が大学での学習には適していない」「投影用教材で扱っている事例が古くなっている」「事例のテーマに統一性がない」「テクニックに走りすぎている」「ビジネス用のスキルと、スタディ・スキルの混同がある」という意見が出された。また、これまで学部・学科から授業を参観した教員から寄せられた意見として、「手足だけを動かすテクニックに重点を置きすぎていないか」という意見もあった。

(2) 教科書の収集と分析

教材改訂に当たっては、国内外のスタディ・スキルに関する教科書を収集した。日本では、大学生のスタディ・スキルに関する教材開発は、2000年以降各大学および大学関係者により活発に行われている（上村ほか，2004；藤田編，2004；北尾ほか，2005；世界思想社編，2013；佐藤ほか，2014；松本・河野，2015）。スタディ・スキル全般に関する教科書だけでなく、レポートの書き方やプレゼンテーションなど授業内容に特化した書籍等も収集した。

教科書を収集した後、各教科書の構成と特徴について分析した。各教科書の章立てを書き出し、『大学での学び入門』の構成と比較した。比較を通して、『大学での学び入門』が網羅できていない観点について検討した。

(3) コンセプトの検討と見直し

教材に一貫性を持たせるために、改訂する教材のコンセプトを検討した。コンセプトがなければ、内容がバラバラになってしまったり、学習目標が不明確になると考えたからである。コンセプトを検討する際には、既存教材に対する意見、他の教科書との比較から得た知見を参考にした。

改訂する教材のコンセプトの1つが、知の探究である。大学での学びの最大の特徴は、知の探究にある。自ら問いを立て、具体的な課題を設定し、調査・研究、他者との議論を通して知を統合・創造していくことである。もちろん、このような知の探究は生涯にわたり継続的に行うものであるが、知を探究するための学び方を学ぶのは大学においてであろう。学生が学士課程を通じて知を探究するための学び方を身につけていくための最初のステップとなることを期待して、生涯にわたる知の探究をコンセプトとして設定した。

もう1つが、ワークにもとづくスタディ・スキルの育成

である。ワークを組み込んでスタディ・スキルを学習することに対して、学生の意欲の向上や理解を深めるという意見があり、既存教材の特徴を維持することにした。

(4) 教科書の章立て案の作成

知の探究という上述のコンセプトをもとに、『大学での学び入門』の新しい章立て案を作成した。現在のところ、既存教材の章構成に加えて、知の探究に関連する章を追加した章立て案となっている。

具体的には、知の探究というコンセプトを学生に分かりやすく伝えるために、「大学での知を理解する」「多様な学び方を身につける」などを加えることを検討している。また、知の探究の基礎となるのは問いであり、「問いをもつ」という章も設けている。

(5) 投影用教材の作成と試行

昨年度後期から教科書の改訂に向けて上述のような手順で検討を行ってきた。2016年度については、各学部・学科の授業計画との関連もあるため、依頼を受けた授業回の投影教材を上述の2つのコンセプトに添って改訂し、担当する授業で試行した。

(6) 章立ての再構成

現在、章立ての再構成中である。各章と愛大学生コンピテンシーとのつながりについても検討している。

なぜこの授業が必要なのか？ 大学での学び方を理解し、 知の探究者となる。

・ 達成目標

1. プレゼンテーションとは何かを説明することができる
2. 自分に合ったプレゼンテーションのスキルを選択することができる
3. 発表者・聞き手としてのルールを説明することができる

図3 プレゼンテーションの必要性

(2) プレゼンの効果

- ・ 知の伝達
知を共同体のメンバーに伝えるため
- ・ 知の共有
知を共同体で共有するため
- ・ 知の精緻化
知を共同体のメンバーで批判的に検討するため
- ・ 知の整理
自分自身の思考を整理するため

図4 プレゼンテーションの効果

4.3 教材改訂のポイント

改訂した教材では、コンセプトとして掲げた知の探究という観点から、スタディ・スキルを位置づけている。既存教材と同様に、授業内容を身につけることの必要性を説明している。既存教材では、大学の授業、就職活動、職場で必要となるからという説明を行ってきた。改訂した教材では、新入生を「生涯学び続ける知の探究者」と位置づけ、知を探究するうえで必要なスキルであるという説明を行うようにした。また、新入生セミナーAは大学での学び方を学ぶ場であり、学生は「知の探究者」として大学4年間さらにその先も学んでいく存在であるということを毎回、説明するようにした。図3は、プレゼンテーションに関する授業回で、プレゼンテーションの必要性を説明する際に提示したスライドである。

また、スタディ・スキルを身につけることの効果についても、知の探究という観点から説明するようにした。図4は、プレゼンテーションの効果を説明する際に提示したスライドである。プレゼンテーションは、知を探究していくために必要となる知の伝達、知の共有、知の精緻化、知の整理という活動と関係しているという説明を行った。

視聴覚教材についても、知の探究という観点から選択するようにした。これまで、学生たちの理解を深めるために視聴覚教材を用いてきた。しかし、学生の興味を引くことに注力したために、大学の知とは直接的には関係のない内容の教材であった。今回の改訂を通して、大学の知と直接的に関係するアカデミックな内容を含む教材を活用するようにした。

例えば、プレゼンテーションの既存の視聴覚教材は、テレビ番組をもとにしたものであった。視聴者からの依頼を受けた内容に関して、広告代理店の営業マンなどが企画紹介のプレゼンテーションを行うというものであった。テレビ番組を取り入れているため、学生の興味を引きやすいが、学生たちが大学で実際にプレゼンテーションをする場面としては適していなかった。そこで、今回の視聴覚教材には、学生が学会発表のためのプレゼンテーション練習を行っている映像を選択した。ノートの取り方についても、既存の視聴覚教材はテレビ番組での著名人へのインタビューを使用していたが、他大学の教授による「剽窃」をテーマにした講義映像に変更した。

5 まとめと今後の課題

本稿では、新入生セミナーAにおけるスタディ・スキルの育成に向けた教材改訂のプロセスを整理してきた。既存の『大学での学び入門』と投影用教材の特徴として、キャリアを視野に入れている点、テクニックを重視している点、ワークを重視している点の3つに整理した。その後、現在進めている教材改訂の理由とプロセス、改訂のポイントを

説明した。改訂の主なポイントは、キャリアを視野に入れたスタディ・スキルから大学での学習や生涯学習に求められる探究を志向するスタディ・スキルへの転換である。学生の思考を促す授業構成を心がけ、活用する視聴覚教材も変更した。

試行的に実施した授業では、授業を観察している学部・学科の担当教員やTAから意見やフィードバックを得るよう心がけた。特に、授業で取りあげる内容や各学部・学科の他の授業回との関連についても意見を収集したい。

教材の改訂はまだ途中段階である。今後は前期で実施した投影教材の見直しと検討を行うと共に、教科書の構成を再検討する段階に入っている。来年度中には、教科書の構成と内容の試案を作成し、教育企画室および各学部・学科の担当者に意見を頂く予定である。

継続的な改訂・検討を加え、新入生の大学生活への円滑な移行とともに、探究を志向するスタディ・スキルの育成に資する教材を開発したいと考えている。ぜひ、関係者の皆さんからの意見・フィードバックをお願いしたい。

【参考文献】

- 愛媛大学教育・学生支援機構（2016）『大学での学び入門』（第10版）
- 藤田哲也編著（2004）『大学基礎講座』北王路書房
- 北尾謙治，実松克義，石川有香，早坂慶子，西納春雄，朝尾幸次郎，石川慎一郎，鳥谷博，野澤和典，北尾S.キャスリーン（2005）『広げる知の世界大学でのまなびのレッスン』ひつじ書房
- 中島英博編（2016）『シリーズ大学の教授法授業設計』玉川大学出版部
- 松本長彦（2013）「愛媛大学学生として期待される能力～愛大生コンピテンシー～」を解説する（試論）『大学教育実践ジャーナル』第11号
- 松本茂・河野哲也（2015）『大学生のための読む書くプレゼンテーションの方法』玉川大学出版部
- 中澤努，森貴史，本村康哲（2013）『知のナビゲーター』くろしお出版
- 庭崎隆，野本ひさ，佐伯修一，岡田克俊，橋本巖，山本万喜雄，糸岡夕里，小林直人，上田博史，垣原登志子（2012）「大規模初年次科目「こころと健康」の科目設計と標準化」『大学教育実践ジャーナル』第10号
- 世界思想社編（2013）『大学生学びのハンドブック』世界思想社
- 佐藤望，湯川武，横山千晶，近藤明彦（2014）『アカデミック・スキルズ大学生のための知的技法入門』慶應義塾大学出版会
- 上村和美，荒井真太郎，内田充美，西川真理子，藤木清，堀井祐介，横川博一（2004）『知のステップ』くろしお出版
- 吉岡路（2013）「学習者を主体とした高大接続教育の課題と展望」『立命館高等教育研究』第13号，43-60頁
- 中央教育審議会（2008）「学士課程の構築に向けて（答申）」
- 中央教育審議会（2012）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成

する大学へ～（答申）」

中央教育審議会（2014）「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育，大学教育，大学入学者選抜の一体的改革について（答申）」

文部科学省（2015）「平成25年度の大学における教育内容等の改革状況について（概要）」

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2016/05/12/1361916_1.pdf（2016年10月4日）